

おおさか
KEY
ワード
第39回



写真：
大阪クラシック
(2012年の様子。
「調理場のレビュー」という曲に
あわせて、コックさん、メイドさんの
格好で演奏。)
場所：大阪市中央公会堂
撮影：飯島 隆

今年で八年目、
テーマは「発掘」



昭和はじめ、道頓堀を散策していた文芸評論家の小林秀雄(1902~1983)の脳裏で、モーツアルトの交響曲第40番ト短調の終楽章のメロディーが鳴り響いた。「僕の乱脈な放浪時代の或る冬の夜、大阪の道頓堀をうろついていた時、突然、このト短調シンフォニーの有名なテエマが頭の中で鳴ったのである」、評伝『モーツアルト』の一節にある。

道頓堀という歌謡曲や演歌の街に思われがちだが、戦前はジャズであり、劇場ではクラシック音楽のコンサートも開かれていた。小林の耳にはダンスホールのジャズや客引きの声などが聞こえていただろうが、そんな場所で、天の啓示のようにクラシックが鳴ったのが芸術の力を示して面白い。

街を歩いてクラシック音楽。こんなイベントが平成18年から8年間続いている。今年は9月8日(日)から9月14日(土)までの1週間、都心のビルやホテル、ホールを会場に開催される「大阪クラシック～街にあふれる音楽～」である。プロデューサーは、大阪フィルハーモニー交響楽団の音楽監督をつとめ、現在は同楽団桂冠指揮者の大植英次さんである。

御堂筋や中之島界隈のビルやホテル、カフェなど35箇所・38会場で、全100もの公演が行われる。会場は、大阪市役所や中央公会堂、相愛学園、大阪弁護士会館、京阪なにわ橋駅アートエリアB1、船場センタービル、グランフロント大阪、証券取引所アトリウム、中之島フェスティバルタワー、スイスホテル南海大阪ほか多彩である。

演奏は、大阪フィルハーモニー交響楽団、大阪交響楽団、日本センチュリー交響楽団、関西フィルハーモニー管弦楽団、大阪音楽大学だが、文化芸術に無関心と言われてきた大阪という都市におけるオーケストラの歴史が、芸術を愛する先人たちの努力のたまものであることを華やかなイベントのたびに思い返さざるをえない。

大阪フィルハーモニー交響楽団は、昭和22(1947)年、満洲から引き揚げてきた指揮者・朝比奈隆と関

西財界の尽力で関西交響楽団として結成され、昭和35(1960)年に大阪フィルハーモニー交響楽団となる。

日本センチュリー交響楽団は、平成2(1990)年に都道府県唯一の吹奏楽団であった大阪府音楽団を発展的解消する形で、大阪センチュリー交響楽団として設立された。豊中市に本拠を置き、平成23(2011)年に現在の名称となった。

大阪交響楽団は、昭和55(1980)年、民間の音楽愛好者によって大阪シンフォニカーとして設立された。「聴くものも、演奏するものも満足できる音楽を!」をモットーに、高名なトーマス・ザンデルリンクを客演指揮者に迎えて実力を養った。

関西フィルハーモニー管弦楽団は、昭和45(1970)年設立のヴィエール室内合奏団からスタートし、企業メセナの一環として楽団が運営され、昭和57(1982)年に現在名となる。ベートーヴェン、ブルックナー、シベリウスの交響曲全曲演奏のほか、関西ゆかりの作曲家貴志康一、大澤壽人の作品も積極的に取り上げている。貴志康一(1909~1937)は、自作「大管弦楽のための日本組曲」をベルリンフィルを指揮して録音した天才音楽家で、組曲の第3曲「道頓堀」を聴くと、小林秀雄とは別の音楽が彼のイメージの道頓堀で鳴っていたことがわかる。

市民のクラシック音楽への愛情を考えると、昭和30(1955)年公開の「ここに泉あり」を思い出す。敗戦後の衣食住にも困る時代、高崎の市民オーケストラが困難を乗り越えて群馬交響楽団へと成長する姿を実話をもとに描き、岸恵子、岡田英次、小林桂樹、大滝秀治、沢村貞子のほか、日本近代音楽の基礎を築いた山田耕筰(1886~1965)本人も出演して、観客動員300万人を超える大ヒットとなった。

「大阪クラシック」は芸術の香りを身近に感じることの出来るイベントだが、単なる街おこしではなく、市民の音楽への純粋な愛と情熱を育む芸術祭としても、深い気持ちで味わいたいものである。